



Title	構造言語学
Author(s)	福村, 虎冶郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 6, 175-187
Issue Date	1957-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33240
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P175-187.pdf



構造言語學

—方法と領域—

福村虎治郎

構造言語学

——方法と領域——

福村 虎治郎

一

アメリカやデンマークを中心に、新しい方法による言語研究として起った構造言語学 (Structural linguistics) が、戦後わが国へも紹介され、時にはこれでもって言語学の新旧の区別がつくと考えられることもあるようである。以下主題をアメリカの構造言語学に限って論ずることにする。一般に構造言語学と呼ばれているものも、細部に於ては必ずしも一致していないようである。先ず第一に、それは記述言語学 (Descriptive linguistics) と呼ばれ、その内容も、例えばグリーソン (H. A. Gleason) の *An Introduction to Descriptive Linguistics* や ホール (R. A. Hall) の *Leave Your Language Alone!* の如く、音声、意味、通時的研究などに及んでいることもある。次に、この派の研究方法に於て分布状況 (Distribution) への考慮が重要なのであるが、人によつてはそのほかに意味をも考慮する。例えば、ブロック (B. Bloch) とトレイガー (G. L. Trager) は *Outline of Linguistic Analysis* に於て、音素 (Phoneme) 決定に意味や音声学を考え (三八頁、三九頁、四二頁)、形態素 (Morpheme) 決定にも意味を考える (五三頁、六三頁)。ナイダ (E. A. Nida) は *Morphology: The Descriptive Analysis of Words* に於て、意味の類似や相違を確かめることは困難であることを認め (七頁、五六頁)、現象を分類するその方法に於いていかなる言語同志も完全には一致しな

いことを述べ (一五七頁)、語を直接成分 (Immediate constituents) に分析するような場合にも意味より置き換え得ること (Substitutability) の方が重要であるとする (八九頁)。それにもかかわらず、形態素の決定には音声・意味的 (phonetic-semantic) な考慮が必要であると到るところで述べている (六頁、一四頁、一五頁等)。グリーソンも前掲書に於て、音素を決定するのに音声学を考慮し (二四頁、一六二頁等)、形態素決定には内容 (Content) を考慮する (五六頁、六六頁等)。しかしハリス (Z. S. Harris) は少くとも方針としては意味を考慮しない。このように違いはあるが、純粹に記述的なものは、やはりハリス式に客観性の強い外形とその分布状況にたよらざるを得なくなるだろう。そしてこの派の特徴を示す領域も必然的に限定されることになるう。

語形論 (Morphology) や統辞論 (Syntax) の区別についても、ブロックとトレイガーはこれを認める (前掲書五三頁)。ナイダは両者が重なり合うことがあることを認めるが (前掲書一〇四頁、一七五頁)、しかしこの区別をする (二〇二頁、一六二頁)。グリーソンも同様に区別する (前掲書一二八頁)。彼等に反しハリスは特に区別をたてていない。以下主として、ハリスの *Methods in Structural Linguistics* とフリーズ (G. C. Fries) の *The Structure of English* を中心にして、構造言語学の特徴を簡単に述べ、二、三批判をなし、構造言語学の言語学に於ける位置を確かめようと思う*。この両書を選んだのは、ハリスは構造言語学の特徴を最もよく示していると思われるし、フリーズの著書は構造言語学をよく英文法に適用していると思われるからである。

* 以下特にことわらない限り頁数は両書のそれを指す。

二

ハリスの方法を簡単に説明する。構造言語学は、発話 (Utterance) またはその一部としての言語の構造を簡潔に記述するのである。学問として当

然のことであるが、それは個々の発話またはその一部としての言語をそれとして述べるのではなく、多くの個々のものに共通に認められるものを述べる、即ち一般的に記述するのであり、実際個々のものを述べるにも、この一般的なものととの関係に於て述べるのであり、かくしてこそ記述が簡潔に減少するのである（五九頁、六三頁、一六三頁等）。

一回一回時と所によつて限定された発話にとどまつていては、このような一般的な記述が出来ないのはいう迄もないのであるから、この一回切りの (unique) 発話の多くから、それらを分割して、一般的に取扱われ得る要素 (element) を形成する。かくして、構造言語学はこの要素の結合の仕方を一般的に簡潔に記述することになる。そして発話の比較的短い部分に於ける要素が音素であり、発話の長い部分または発話全体に於ける要素が形態素である。そしてこれら要素としての音素と形態素を決定する際に、この学派の特徴が見られ、それはその方法として置き換え (Substitution) や分布状況 (Distribution) や補足的分布状況 (Complementary distribution) への考慮が重要なことである。この点に關して既に述べたように、人によつて多少異なるが、大綱に於ては一致している。ハリスによると、発話に於て、ある要素 A に近隣する他の要素をその A 要素の状況 (Environment) と呼び、多くの場合に見られる状況の総計をその A 要素の分布状況と呼ぶ（一五頁—一六頁）。

先ず発話に分割 (segmentation) を施す。この分割も置き換えによる。例えば、現実に聞かれる発話 *Can't do it, Camera cost too much* に於て、前者の最初の部分 C を後者の最初の部分に置き換えても、聴者としての英語使用者は、初めの *Camera cost too much* と同じものとして、即ち反復として、反応する。かくして、初めの *Camera cost too much* の C と反復とみなされた時の *Camera cost too much* の C と同じものとされ、従つてこれらはまた、*Can't do it* の C と同じものとされる。ここに C 分割片 (segment) が生ずる。このような分割片のうち

出来るだけ短いものを得るように努める。例えば、*I'll pack it* を分割して、*A (=al), T (=the), k, I (=it)* なる四つの分割片を得ることも出来る。しかし、これにならつて、*I'll pack it* を *A, P (=p^hæ), k, t* と四つの分割片に分割すると、*T* の最後の部分が *P* の最後の部分と置き換え可能である。従つて *T* や *P* は最終的な分割片とはならず、更に分割される（三五頁）。しかし、ある状況に於て常に相共に認められるものは、分割しないで一つの分割片とみなす。例えば、*tip* [*tʰɪp*], *pick* [*pɪk*] に見られる、*tʰ*, *p^h* は、この状況にあつては常にこの結合で現われるので、夫々一つの分割片とされる（四二頁—四三頁）。

かくして、例えば、*can* [*kæn*] は *k, æ, n* と三つの分割片に分割され、この *can* を反復しても、それに含まれる各分割片は同じであるとみなされる。また同様に、*camera* を反復しても、それを構成する各分割片は同じであるが、この *camera* の *c* を *can* の *c* の場所に置き換えても、先に述べたようにに反応は同じであるから、*can* の *c* と *camera* の *c* とは同一分割片である。之が不可能な場合は異なる分割片とされる。

次の段階では補足的分布状況を考慮する。例えば、*kʰ* は *ay* なる状況に見られ、*k* は *ay* なる状況に見られる。従つて *kʰ* と *k* は状況に於て相補う分割片と考えられ、これら二つの分割片は同一のものともみなされる（六一頁）。そしてハリスはこのようにして出来上つた分割片の群を音素となす。しかし、このような分布状況に於て、ある分割片と相補う分割片は一つだけでなく、他にもある場合が多い。そこで、このように二つ以上の相補う分割片のうち、どれを選んで一つの音素にまとめるかが問題になる。それには幾つかの基準がある。第一に音素の数が最少になるように努める。従つて一つ一つの音素の状況が最大のものになるようにする。第二に同一の音素を形成する幾つかの異音 (Allophone) の性質に共通なものが認められるようにする。第三に各音素を形成する異音の相互関係が特殊なものでなく、かなり一般的であるようにする。例え

ば、 $[p]$ に含まれる p 、 $[p^h]$ の h の有無と状況の関係は、 $[t]$ に含まれる t 、 $[t^h]$ の h の有無と状況との関係に等しい。第四に各音素の状況の総計即ち分布状況が大体同じになるように考慮する。

* #は連接 (Juncture) を表わし、Vは母音を表わす。

しかし、ここに注意しなければならないことがある。例えば、グリーンによると、いくつかの音声が相集つてある一つの音素をなすためには、音声学的に類似している (phonetically similar) ことが必要である (前掲書二四頁、一六二頁)。しかしハリスにあつては、上に述べたような音の性質に考慮を払つても、それは直接には音そのものの発声上または聴覚上の異同を基にしているのではない。もしそうしたとしてもそれは補佐的である。例えば、同一音素に含まれる異音が共通な部分を持つていと言つても、それはその共通な部分に対して、聴者が同一のものとして反応すると言うに過ぎず、それ以上のことは問題にしていけないのである。この点ハリスの態度は徹底している。

以上のような過程には、上に述べたもののほかに、強勢 (Stress)、音調 (Intonation)、連接 (Juncture) などの要素も考慮される。上に述べた音素も、更に少数の構成要素 (Component) に分析され、従つて各音素はこれら構成要素の結合の仕方によつて、夫々特有のものとなる。そしてこのようにして成立した音素相互の結合関係が音素的構造である。

三

次に形態素について述べる。以上述べてきた音素の結合は発話の短い部分に於いて認められる。発話の長い部分または発話全体に於いては、上に述べたような音素の結合が現実には不可能な場合がある。このような場合、単なる個々の音素の結合即ち個々の音素の分布状況が問題となるのではなく、多くの場合、個々の音素を結合したものが一つの単位とな

つて、それら単位同志の結合関係即ち分布状況が問題となる。例えば、音素 $[i]$ と $[l]$ とはかなり自由にお互にまたは他の音素と結合出来る。例えば $[i^h]$ 、 $[i^h k w e l]$ (ink-well), $[i^h w e l i ŋ]$ (welling) のように。しかし $[w e l i k]$ なる結合は許されず、また $[h e r e y e s w e i]$ なる状況では、welling は許されるが、ink-well は許されない (一五六頁)。

このように、発話の長い部分または発話全体の構造を問題にすると、新たな要素を見出して、その要素によつて、これら発話としての言語構造を述べることが必要となり、これが構造言語学の目的に適うのである。そして必ずしも単一の音素から成立せず、多くの場合音素の結合からなるところのこの新たな要素が形態素である。そしてこの形態素の決定にも、音素決定の場合と同じように、置き換え、分布状況、補足的分布状況が考慮される。この点に於いてもハリスは徹底している。例えば、グリーンは音素決定に音声学的に類似していることを考慮しているように、形態素決定には意味にたよつて (前掲書五二頁—五三頁)。ハリスによると、現実に見られる、 $[t h a t s o u r r o o m e r]$ と $[t h a t s o u r r e c o r d e r]$ とを比較すると、前の発話の $r o o m$ の代りに後の発話の $r e c o r d$ を置き換へることがわかる。このような場合、 $r o o m$ は形態素と認められる必要な条件を具えている。置き換えに使用されるものが零であつてもよい。例えば、 $[t h a t s o u r r o o m e r]$ と $[t h a t s o u r r o o m]$ とを比較すると、前の発話の $-e r$ は零で置き換えられることがわかる。従つて $-e r$ も形態素となり得る必要な条件を具えている (一五七頁—一五八頁)。しかしこれだけでは不十分である。例えば、 $[w h e r e s t h e b a g ?]$, $[w h e r e s t h e r u g ?]$, $[w h e r e s t h e b u g ?]$ 等を上の方法によつて比較すると、 $-a$ 、 $-u$ 、 $-b u$ 、 $-g$ が形態素となり得る。しかしこのようなものを形態素としても、この場合は同じような状況を持つこれらも、形態素と認められる他の多くのものに關しては、同じような状況関係を示すことはない。またこれらの分布状況に対立するような分布状況を持つ他の形態素

の群も認められない。かくして一般的な記述が出来なくなる。従つて以
上のものは形態素と認められないことになる(一五九頁—一六〇頁)。同様
に、note, notice の関係に見られる -ce も形態素とされない(一六三
頁—一六四頁)。

形態素決定の基本的方法は以上のようなものであるが、次にいかなる
ものを同一形態素とみなすかが問題となる。音素の場合と同じように、
反復と認められる発話の同一の形態素から成立していると考えられる。
次に補足的分布状況を考慮して、音素的には異なるものを同一の形態素
と考える。例えば、knife, knives を比較すると、knife は s なる状
況に見られ、従つて knife と knife は状況に於いて相補い、これら状
況の和は、例えば、rug, dog, etc. (rug, dogs; dog, dogs; etc.) のそれと
同じである。しかもこのようなものは他にも見られる。例えば、wife,
wives; wolf, wolves; etc. 従つて knife と knife は同一形態素
(knife) を形成する。これを表記するために、形態音素 (Morphopho-
neme) なる記号を作る。例えば、knife, knife を含む (knife) を [naɪf-]
で表わす。同様にして、be, am, are, is の [i-] was の [wɜ-] were の
[ɜ-] も同一形態素となる(二〇〇頁—二〇一頁、二〇三頁等)。

ある形態素は零構成員を持つと考えられる。例えば、talked の [t-],
begged の [p-], added の [ad-], taken の [an-] が一つの形態素を構成
するが、cut の場合はこの形態素は零である。同様に、talked の [t-],
begged の [p-], added の [ad-], take → took の [ey-] → [u-] からな
る形態素は、cut の場合では零である(二一三頁—二一四頁)。このように
して同一形態素が形成され、形態素の数は減少する。勿論、音素形成の
場合のように、分布状況が一般的なものであるようにするため、音素的
に同じでも、幾つかの形態素に分けられることもある。例えば、特殊の
分布状況を持つ [tuw-] は、three, four, six などと類似の分布状況を持
つ形態素 {two}, also と類似の分布状況を持つ形態素 {too}, from,

with, at などと類似の分布状況を持つ形態素 {to} に分けられる(一九九
頁—二〇〇頁、二〇二頁、二五七頁—二五八頁)。

さて形態素は、今迄述べてきたもののように、必ずしも接続している
ものだけに限られるのではない。例えばラテン語の filius bonus では、
...us が一つの形態素とされる(一六五頁—一六六頁)。また take :
took に見られる変化そのもの(一六七頁)、believe : belief に見られる
無声化(一六九頁)、強勢、例えば convict : convict (一六九頁)、文強勢
(Sentence stress) (一七〇頁)、語順(一八四頁)等も形態素と考えられ
る。

かくして発話はこのような形態素の結合によつて示される。しかし発
話の多くについで、更に一般的に記述するためには、互に置き換え得る
形態素を即ち同じような分布状況を持つ形態素をまとめて形態素のクラ
スを作る。例えば、large, true, high, etc. を形態素のクラス A、
life, hotel, house, etc. を形態素のクラス N、see, tie, find, etc. を形
態素のクラス V とする。更に二つ以上の形態素が結合したものが、ある
一つの形態素に置き換えられる。このようにしてもまた形態素のクラス
が出来る。例えば A (large, true, utter, etc.) + ly = D (very, well, etc.)。
かくして発話はこのような形態素のクラスによつて表わされる。実例を
示すと、My most recent plays closed down は、結局は N⁴ V⁴ とな
るが、この N⁴ と V⁴ は夫々 TN³, V²V¹ から成立し、これらはまた夫々
TN²、V¹V¹P¹ から成立し、前者は更に TAN²、更に TDAN² から
成立している。形態素のクラスの記号と右の文中の形態素の対応は次
の通りである。T (my), D (most), A (recent), N³ (play)-s, V¹ (-ed),
V¹ (close), P¹ (down)。同一記号に数字が附加されているのは、数の
多い方が少ないものに置き換えられ得ることを意味する(二七九頁)。

このようにして、発話が形態素のクラスによつて簡単に記述されるの
である。しかし、例えば、形態素のクラス N と形態素のクラス V の結合

が可能だとしても、この一般的なクラスNとVに含まれる総ての構成員同志が結合可能でなく、サブクラス (subclass) NとサブクラスVと結合可能なことが稀でない。それでこのような形態素のクラス間の分布状況も研究される。例えば、*She's a good cow* ($N_1 V_1 N_2$)に於て、*she*と*cow*は相伴つて見られるが、例えば*cow*の代りに*cow*と同様にNに含まれる*bull*を置くことは出来ない。同様に*she*の代りに*he*を置くことも出来ない。かくして一方には、*she, cow, queen, etc.*のサブクラス、他方には、*he, bull, king, etc.*のサブクラスが認められ、前者者を*N₁*、後者を*N_m*とすると、前者は「後者十F構成要素」であると考えられる。従つて*N₁*と*N_m*はこの点に関しては互に相補つてゐる。かくして、*N₁*に含まれる各形態素は*N_m*のどれか一つの形態素と組み合わされ得るのであるが、この組み合わせにも分布状況が似通つた形態素同志がまとめられる。かくして、*she, he, cow, bull; queen, king; etc.*が成立する。これが普通一般に言われている性 (Gender) に関係する(三〇三頁—三〇四頁)。同様に、格 (Case) や数 (Number) なども取扱われる。

四

以上がハリスによる構造言語学の概略であるが、その形態素論について、従来の文法と比較し、その特徴を述べてみる。その形態素論には一般に語形論と統辞論と呼ばれているものが含まれている。何故なら、形態素には、既に述べたことから理解されるように、接辞 (Affix) や屈折 (Inflection) も含まれているのであるから、これら形態素の結合とは必ずしも独立し得る語と語との結合に限られないのであり、それは語の内部に於ける結合にも関係する。勿論、構造言語学でなくとも、語形論と統辞論の区別は判然としないことを認めているのであり、一方構造言語学でも、独立し得るそれ自体で発話となり得る形態素とそうでない形態素の

違いを認め、夫々独立形 (Free form)、拘束形 (Bound form) として區別している。そして独立形同志の結合と拘束形同志の結合、または独立形と拘束形との結合に於いて、強勢や連接からして違いの存することを認めるのである。しかしハリスに於ては、このようなことを基準にして語形論と統辞論とを区分する必要はないのである。しかし先に述べたように、同じく構造言語学と呼ばれているものでも、この區別を明かに述べているのが普通である。しかしいづれにしても、従来の文法とは重要な違いが認められる。一般に文法は意味と形態を考慮するという立場をとるのであるが、構造言語学では形態上の分布状況が主であり、それに徹するにつれて意味の役割は減少する。

このような方法による構造言語学の形態素論に於いては、よく論議される文法上の問題の解決にもその特徴が認められる。例えば、*the blue, the rich, etc.*に於て、*the*は形態素のクラスT、*blue, rich, etc.*は形態素のクラスAであり、先に述べたような等式の(一)と(二)T A = Nが成立するので、この結合が *life, hotel, house, etc.* から成立するNと等しくなり、TとAの結合全体でNとなる(二七六頁、二九六頁)。またbutは種々の状況に於いて、*and, so, etc.*と置き換えられるが、*But me no buts*に於てはVとNの地位をとる(二五八頁)。また、*She made him a good husband*と*She made him a good wife*の構造の違いは、後者は、*She made a good wife for him*と自由に交替し得るに反し、前者ではそれが出来ないことに示される(二七二頁)。今一つの方法は、これら二文に於て、性の関係を考慮し、前者を*she + made + him a good husband*と分析し、後者を*she... a good wife + made + him*と分析するのであり、これによつても二文の区別がつく(三〇六頁脚註)。フリーズによると、*the poor*の*poor*は構造上*concert*等と同じくクラス一である(一一八頁、一四〇頁—一四二頁)。また、次の文は下に示したように記号化される。

後に度数の山が認められ、それが語の区切りと一致すると言う (From *Phoneme to Morpheme Language* 三巻二号 一九四頁)

しかしフリーズやその他の学者はハリスのように徹底していない。そしてこういう事実には構造言語学の方法の必ずしも容易でないことが示されていると思われる。全然未知の言語に対する時は別として、広い意味に於ける意味の助けを得ることが実際に都合のよい場合が沢山ある。かくして構造言語学の方法が現実には適用される場合に限度が存在する事になる。実際に述べたように、多くの学者の方法はハリスのそれと比較すると不純なものを含んでいる。ハリスも、形態素を決定する過程に於て、意味による方がより容易な場合やそれから援助を得る場合のあることを認めている (三頁、八頁、一八九頁等)。唯グリースンやフリーズ等と異なつて、方針を首尾一貫させるために、時には過程が複雑となるにもかかわらず、原則を守り通すのである。実例をあげる。フリーズの *The Structure of English* に於いて、普通の文法で S+V+C とされる構文中の V に相当するものが VP とされているが、これをまとめるのに、この VP に属する個々の動詞を分布状況の類似によつて見出すよりも、意味の方からそれを把握した方がより容易であろう (一七九頁)。フリーズはこの著書に於いて、形態素はきまつたものとして取扱ひ (序言八頁)、また品詞や機能語の分類も比較的簡単にしか述べてないので、実際にフリーズが首尾一貫して構造言語学的方法によつて、各語のクラスを決定したのかどうか疑われ、いつの間にか従来の方法による既得の知識を借りたのではないかと思われる例に出会う。このような事情は音素論に於ても認められる。例えば、実際に異なる種々の音声がある一つの音素にまとめられるとするが、この実際に異なるということが構造言語学派の方法だけによつてわかるかどうか疑問なことがある。実際には音声学的知識によつて異なるとされていて、その知識によつたのではないかと思われる。例えば、フリーズは訓練された音声学者は、話者が全く気づかないような音の違いを認めることが出来ると言っている (*Teaching and*

Learning English as a Foreign Language 一〇頁)。従つて音声学者でない限り、たとえ自国語を話す人であつても、その人の反応からは、そのような違いによる区別は得られないと思われる。ハリスのあげた例にもこのようなものと疑われるものがある。ハリスの方法が実際に全般に互つて可能かということに關して、太田朗氏も疑念を表わしている (英文学研究二九、三〇合巻二二八三頁)。

この派の方法について考えなければならないことがほかにある。音素や形態素を決定する方法が置き換えと分布状況への考慮なのであるが、例えば、ある一つの形態素と考えられるものをつとて、そのあらゆる状況を確かめることは実際には殆ど不可能である。従つてハリスは近似法 (Approximation) によることを認する。そしてある形態素のあらゆる状況を確かめることが出来たとしても、実際の効果はさして違わないとする (二五三頁以下、三七二頁等)。このような帰納的な方法、また近似的な価値という点では、それは文法的事実について従来とられてきた方法と大差はない。いずれの場合も、有効な結論は、一般には、多くの実例を材料として、それから帰納的に出されたものである。また一般的に論ずる為には、細部の制限を取上げない、即ち例外的なものを除かなければならない。ハリスに於ても、例えばある形態素のクラスに属する形態素総てが全く同じ状況にあるということは出来ない (二四五頁)。現実に見られるこのような制限を取上げると、構造言語学の外形上の整然とした姿は崩れるのである (二二〇頁、二四六頁)。構造言語学的方法を英語に適用したフリーズの *The Structure of English* でも屢々このような細部の問題は取上げられていないのである。しかるに普通の文法書で詳細に及んでいるものはこのような所謂例外的なものをも取上げているのである。そのために一見統一性がないように見られる。

六

構造言語学の方法が以上のようなものであれば、その領域も必然的に

制限されてくる。それは一方では従来厳密に区別されなかつた音声学との対照によつて、音、強勢、音調等を対象とする独自の領域を持ち、他方では従来の文法の対象をその対象とする。しかし後者について注意しなければならないことがある。それは従来の文法は意味と形態との両面を対象としたのに反し、構造言語学はその方法に徹すると形態の面だけに対象を限らなければならないことである。置き変えや分布状況の異同の背後にあつてそれを可能にする意味は直接には考慮されない。最初に述べたように人によつては記述言語学として、音声や言語の変化を取上げるが、少くともこの派の特徴は音素と形態素による構造にあることを認めなければならない。ハリスによれば、構造言語学は言のある様相に見られる規則性を取上げる。そしてその規則性はこれら様相間に認められる分布状況に見られるものである。従つて言に見られる諸様相のその他の関係、例えば、音や意味そのものの類似とか歴史的研究に於ける発生の関係は取上げられない(五頁)。また方言とか文体上の区別等言語と文化や個性との関係も取扱われないのが普通である(一一頁、一八六頁—一八七頁、一八九頁—一九〇頁等)。ハリスの場合でも、音そのものの性質や意味が考慮されているように思われることがある。というのは、先に述べたように、構造言語学の基礎には、発話やその部分が他の発話やその部分に置き換えられたとき、その言語使用者に於て、それらが同一であるとか異なるとかいう反応が必要である。このような反応にはその発話やその部分についての異同が先行する筈である。そしてこの異同の認識には、発声上または聴取上の音声の性質や場面や意味が関係してくる。この点はハリスも認める(七頁、二〇頁、二六頁等)。グリーンソンもこれを認める。しかしハリスにあつては出発点は同一であるか、または異なるかとなす反応そのものであり、その原因は問題にされていない。また結果からして、分布状況の違いと意味の違いとが対応することがあることを認める。例えば、ハリスは school, bed, jail, poker, etc. は

共に、He was in—, He was in the—なる状況に見られるが、house, prime of, city, etc. は大部分、He was in the—なる状況に見られ、一方 trouble, good form, etc. は大部分、He was in—なる状況に見られるとし、このような違いはたかたか意味の違いによると言っている(三三三頁脚註)。しかしこのような場合でも、これら語は単に分布状況の違いによつてのみサブクラスに分けられるに過ぎない。

従つてハリスの言う構造言語学の領域を充分に認めても、そのほかに音声学 (Phonetics)、意味論 (Semantics)、言語地理学 (Linguistic geography)、またこれらを基礎にした通時言語学 (Diachronic linguistics)、更に他学問との関係に於て、言語心理学 (Linguistic psychology)、言語社会学 (Linguistic sociology) 等種々の研究分野があることは言う迄もない。従つてソシユール (F. de Saussure) の外的言語学 (Linguistique externe) (*Cours de Linguistique Générale*) (四〇頁) や最近言われているメタリンクウィスティックス (Metalinguistics) もハリスの構造言語学に直接関係はない。

さて言語には意味の面があることは誰しも認めるのである。然るに構造言語学は、本質的には聴者の立場にあつて、言語形態を以上の方法で分類し認識し、しかも根本的には主としてこの段階にとどまつてゐる(二八九頁—一九〇頁)。音声の話者から聴者に到る過程は言行爲の一部に過ぎない。従つてこの段階にとどまつてゐる言語の一面だけを取上げているのである。例えば、形態素論に於いて、分布状況が同じであるか異なるかによつて、形態素のクラスの異同はわかり、かくしてある言語の外面的な構造はわかるが、いかなる場面に於いていかなる意味に応じて、そのような構造をとるかは不明である。例えばハリスのこの著書中、perfective (一六五頁)、past (一六七頁)、noun (一六八頁)、verb (一六九頁) などと言われている、それは単に分布状況の違いによつて違いがあると言ふことを示すだけであり、何ら意味そのものを示しはしない。これを

英語に應用したフリーズの *The Structure of English* から例を借りる。フリーズによると次の文は下に示されたように記号化される*

The particular social event of the season
D 3 3 1^a f D 1^b
it F it

usually claims the full attention of the
4 2 D 3 1^c f D
it F

students who stay in town.

1^a f 2 f 1^e
+ J + F it
he he

(二六八頁以下)

* 十は複数を表わし、he, it は性 (Gender) の違いを表わし、f は機能語、F はそのグループの一つを表わす。他は一八二頁と同じ。

ここに示されたように、構造言語学によると、右の文中の語がいかなる品詞、いかなる機能語のグループに属するかはわかり、右のように記号化される。しかし唯それにとどまつてゐるに過ぎないならば、実際の言語使用には何ら役にたたない。それはとりもなおさず言行爲の一部しか取上げていないためである。これは音素についても同様である。置き換えと分布状況によつて音素が決つても、各音素が如何なる音声から成り立つてゐるか説明しなければ、実際の役にたたない。例えば、[nd] と [nd] の対応は発声上の無声、有声の対立であると説明して始めて実際に役立ち得るのである。かくして聴者の立場にたつても、形態素からそれに応ずる意味に進み、更にその意味そのものの説明に進まなければ言行爲は完成しないのである。実際に役立つ方向に少しでも近づけば意味迄進まなければならない。ここで構造言語学派も実際には屢々意味をも取扱わざるを得なくなる。そうすると記述は従来の文法のそれと大して違わなくなる。

フリーズは *The Structure of English* に於いて、文法は構造的意味

(Structural meaning) を知らせる手段を取扱うものであると考える(五六頁)。そしてこの手段が構造言語学派の形態上の構造である。従つてフリーズの言う文法はこの構造がいかなる構造的意味を知らせるかということになるから、自然に構造的意味が取扱われることになる。フリーズは既に述べたように語のクラスやグループを形成する過程を簡単に述べ、多くの部分はこれらクラスやグループによる構造と意味との対応即ち氏の考える文法を取扱つてゐる。従つてこの書には到るところに形態に対応する意味や対象が言及されてゐる(九三頁、一〇三頁、一〇三頁等)。全く実用的な意図で書かれた *Teaching and Learning English as a Foreign Language* では語のクラス一、クラス二、クラス三を夫々事物の語 (words for things)、行為の語 (words for actions)、性質の語 (words for qualities) として意味に及んでゐる(四七頁)。また同書でも文脈 (Context) の重要なことを述べ(五四頁、五五頁—五六頁)、*The Structure of English* でも終りの方で社会的意味 (Social meaning) なるものの必要なことを認めてゐる(二九五頁)。グリーンスンも前掲書の第八章、第一章で現実の言語について語形論を例示している箇所では、形態と意味の対応を述べており、従つてそれは従来の文法と大差はないのである。しかしハリスはこのような意味との連関の大部分は構造言語学の固有の範囲の外にあるとしてゐるようである(一八九頁以下)。かくしてハリスのように構造言語学の方法に徹すれば言語の半面だけを取上げざるを得ず、それを避けようとするば、いかに未だ明かにされていなくても、ともかく意味をも取上げざるを得なくなることが理解される。

七

そこでこのような意味の部門が構造言語学の範囲外としてよいかどうか問題となる。形態上の分布状況という言語の半面が構造言語学特有の領域であり、言語の構造というものがこれで尽きるかと言うと、必ずし

もそうでないと思われる。ここで意味への考慮が必要になる。しかし意味をいかに見るかは構造言語学派に於ても必ずしも一致していないようであり、また人によつてはあまり深く考えていない。しかし所謂機械論者 (Mechanist) とか行動主義者 (Behaviorist) と呼ばれているものの特徴が認められる。ブルームフィールドは話者が発話をなした場面 (S) と聴者の反応 (R) がその発話の意味であるとなす (前掲書二四頁、一三九頁)。フリーズも同じように考える (三三頁—三四頁)。しかしフリーズは言語の意味 (Linguistic meaning) は辞書の意味 (Lexical meaning) と構造的意味 (Structural meaning) を含むと言っている (五五頁—五六頁、二九三頁以下)。また意味には辞書的なもの、統辞論的なもの (Syntactical)、語形論的なもの (morphological)、音調によるものがあるとも言っている (Teaching and Learning 三八頁)。そうするとフリーズの場合、この言語の意味が、 $S \rightarrow r \rightarrow s \rightarrow R$ のどこに属するのか不明である。何故なら、S は話者の場面であり、R は聴者の反応であり、r は話者の発した音であり、s は聴者が聞いた音である (三四頁)。ハリスは社会的場面の様相が意味であるとしており、その点他の構造言語学派と同じである (一七三頁脚註、一八七頁)。しかしまた形態素に対応する意味があつて、それは社会的場面と区別されるものでもある (一九〇頁)。グリーソンも言語の内容 (Content) を認め (前掲書四頁)、内容の構造 (Content structure) なるものを認める (二二頁、七五頁)。しかし現在の段階ではその研究が進歩していない。たかだか半科学的であると言う (二三頁)。一方ナイダは構造とは形態上のことと考えているようである (前掲書一五一頁)。

このように、構造言語学派はその特徴として意味に場面をも含めるのであるが、しかしまた言語的な意味をも考えており、ある人は意味の構造なるものの存在をも認める。彼等の言によれば未だ科学的に明かでないのであるが、言語の意味にも構造があり、これまた構造言語学の名に

値いすると私は思う。ハリスの言う如く、彼等の言う社会的場面としての意味なら、音素の結合や強勢などからなる形態によくは対応しないのであろうが (一八八頁—一八九頁)、ハリスの言う形態素に対応する意味、グリーソンの言う内容の構造、またマルティ (A. Marty) の言う内部言語形式 (Innere Sprachform) は外的な形態と完全には一致しないが、それと相即不離のものであり、言語の構造は内面ではこのような意味の構造でもあると思われる。構造言語学派の言う形態素の結合も決して鵠の口真似のようなものでなく、内的な意味構造に従つて、外的な分布状況をなすと考えられる。従つて、従来のように言語の意味と形態とを考慮した場合と構造言語学の方法によつた場合と、主要な点では結果が同じになることは当然のことである。

さてこのようにして構造そのものが形態と言語の意味から成立していると考えて、一応構造が確認された後、その構造を記述する場合、形態を中心とするかもしくは意味を中心とするか二つの方法が生ずる。構造の確認の方法が構造言語学的であつても、その構造に應ずる意味をも述べる場合やはり今述べた二つの方法がある。そして既に述べたように、実際には構造派も形態に対応する意味を記述していることもまた稀ではない。普通の文法では形態から意味の方向であり、構造言語学派が意味を共に記述する時もやはりそうである。しかし外形中心の構造言語学派の方法によつて確認された構造は、その方法の必然的な結果として、今述べた意味の構造を充分に示し得ないことがある。何故なら言語の意味と言語形態がまた完全に一対一で対応していない。例えば、時には同一形態でいくつかの意味に対応することがある。従つて形態中心の構造言語学の限度がここにも見られる。ハリスによると、構造言語学では意味を除いていかなる共通な差異によつても他の形態素 (複数) と区別され得ない形態素 (複数) のクラスは利用され得ない (三七二頁)。フリーズも同じようなことを述べている (八頁脚註)。かくして個々の例に

あたつても構造言語学の方法からは内的構造が明かにされない場合が稀ではない。なぜなら実際には形態上区別不可能な例が沢山ある。例えば、ハリスの著書から例をあげると、*I cut it* が *I miss it* に対応するのか、もしくは *I missed it* に対応するのか不明である（二二四頁）。同様に *I see the sheep* が *I see the dog* に対応するのか、もしくは *I see the dogs* に対応するのか決定出来ない（三三六頁）。これらは状況を拡大すると区別はつくであろう。即ちいずれかに決定出来る形態素が状況として見出される。しかし例えば、音形態上、*I can tell my horse is running* と *I can tell my horse's running*（二五八頁）のような例では、常に状況によつて区別がつくとは断言出来ないであろう。今一つ例をあげると、先に説明したように構造言語学式に、*She made him a good husband* と *She made him a good wife* の区別はつくであろうが、例えば、*She made him a good mate*, *She made him a good companion* といずれか決定出来ないものである。このような例のあるものでは、たとえ構造言語学式の状況の異同を観察しても、いずれとも決定困難な場合のあることは容易に認められる。

フリースの *The Structure of English* に於ても構造の曖昧な実例がいたる所に見られる（六三頁、七〇頁、一三八頁等）。スレッド（J. Sled）はこの様な場合でも、強勢、音調、休止等を考慮すると形態上の区別がつくと言ひ、この点でフリースの取扱ひを批判している（*Language* 三二卷二号三三九頁以下）。しかし総ての場合、このように区別がつくのではなく、曖昧な場合がやはり残ると思われる。例えば、音調や休止が完全に意味の区別に規則正しく対応しているとは思われない。例えば、ハリスも（*Language* 三二卷二号一九六頁—一九七頁）、クワーク（R. Quirk）も（*Language* 同卷同号三〇七頁脚註）、現実には語の区切りと休止の対応とが必ずしも規則正しくないことを述べている。そしてこのような場合、構造言語学的記述では未決定のままに残しておかざるを得ないの

である。しかし現実の話者の立場にあつては、普通いずれか一方の構造に限定されていることは否定出来ない言語的事実である。そしてこのような場合、これら外形の背後にある意味からして内的構造が認められることが稀ではなからう。従つて意味をも考慮して得た結果を記述する場合は、このような意味の違いにも言及することが出来る。

以上総括すると、構造言語学がその主張や方法を徹底させると、必然的に研究対象として言語の半面しか取上げないことになる。その結果、形態素を取扱う部分では、たとえ種々の問題はあろうが、その存在を認めざるを得ないところの言語の内部構造は取扱われないことになる。これに反して、方法に於いても構造の記述に於いても、この内部構造にふれようとすれば、従来の所謂科学文法にかなり接近し、一部の者が言う程度両者の違いは大きなものでなくなる。

（一九五七・一・三一）